高知大学病院ニュース

〔編集〕
高知大学病院ニュース
編集委員会
委員長　大西　三朗
〔発行人〕
高知大学医学部附属病院
病院長　倉本　秋

病院機能評価審査を控えて

病院長 **倉本　秋**

平成16年に（財）日本医療機能評価機構による病院機能評価を受審してすでに4年が経ちました。認定期間が17年の3月から22年の3月までですから、来年の今頃には2回目の受審をする必要があります。審査で良い評価点がつくこと自体が目的ではありませんが、私たちの日常の活動が良い評価に繋がればと念じています。

図は平成16年11月14日に開催された高知大学・医療安全週間記念講演会のポスターです。「患者さんの思い、医療者の思いは線路のように交わることはないのでしょうか」と書きましたが、同じ4年間に両者の思いは更に離れたような気がします。私たちの病院スタッフは全員で患者さんの立場により近づくよう努力していると強く感じていますが、むしろ社会の側に御しがたい遠心力が働いてしまったようです。 医療のパラダイムは根拠に基づいた医療（EBM）、物語に基づく医療（NBM）、患者中心の医療（PCM）へと転換してきました。患者中心の医療そのものは良いことに違いありませんが、誤解を恐れずに言えば、巷間喧伝された患者中心の医療は何かしら社会や患者さんに誤った認識をもたらしたように思えてなりません。

▼平成16年11月14日開催の高知大学・医療安全週間記念講演会ポスター

正直なところ、私たちはこれまで患者中心の医療という表現はあまり使ってきませんでした。平成20年度版の病院案内冊子にも書かせていただいた、「地域のために、そして関係性を重視した医療」という私たちが目指してきた医療は、むしろパートナーシップに基づく医療と表現する方が良いのではないでしょうか。医療評価の項目を眺めていると、そこに流れている精神もまさしくパートナーシップに基づく医療であると感じます。 両者の求めているものは合致しているのですから、裃を着て医療評価を難しく考える必要はありません。高知大学病院はかなりレベルの高い病院になっています。1年間かけて今ひとつ高みに上がって、ソフト面では全国の病院が目指すべき姿と言ってもらえる病院を目指しましょう。

最近、ちょっと嬉しかったことをお知らせします。

1. 19年度の職員健康診断を未受診だった3名の職員が、先日健康診断（かかりつけ医のデータ提出を含む）を受けてくれました。受診率100％です。
2. 病院玄関右手、総合診療部の窓の外に、試験的にゴーヤ（にが瓜）のネットを作ってもらったところ、室温が4℃下がっています。来年度は他の場所でもいかがでしょうか？
3. 先日再受診で来院されたA科の急患を、B科とC科で併診。さらにC科の教授は学会出張から急遽帰って対応してくれて、患者さんは無事退院されたそうです。

『高知市土佐山へき地診療所について』

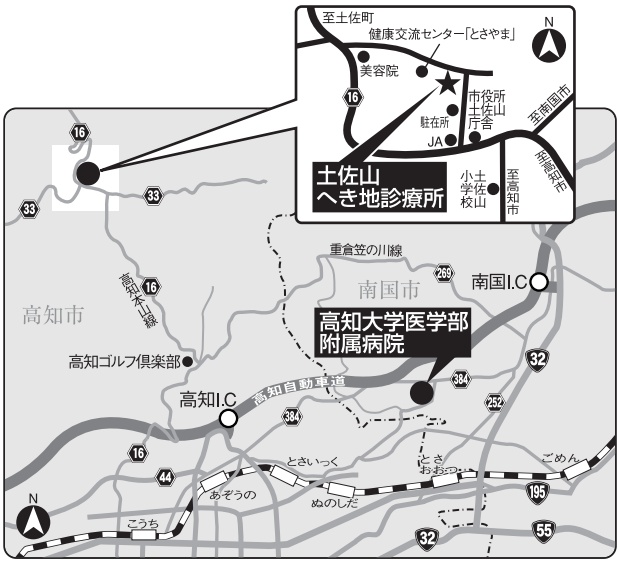
教育研究部医療学系医学部門講師
高知市土佐山へき地診療所管理責任者
松下 雅英

平成20年7月1日付けで、高知大学が高知市土佐山へき地診療所の指定管理者となりました。土佐山地区で安定した医療体制を確保したい高知市と、土佐山へき地診療所を、高度に専門分化した大学附属病院では経験することが難しいプライマリ・ケアの教育現場と位置付ける高知大学との意向が一致し、実現しました。

運営移行に伴い、私は高知市健康福祉部健康福祉総務課を退職し、高知大学に着任致しました。大学卒業後、高知県が指定する市町村の公立医療機関で地域医療に従事しておりましたが、その内の11年余りは農村の診療所勤務でした。そこでは、限られた医療資源の中で、継続的かつ包括的な、疾病予防、治療、リハビリテーション等に取り組んでまいりました。医師として専門性への憧れのようなものを心の片隅に抱きながらも、このように長年続けて来られましたのも、村幹部の熱意や地区住民の方々の純粋な感謝の気持ちに支えられてのことであったように思います。また、土佐山へき地診療所に赴任した翌年の平成15年より、高知大学医学部附属病院総合診療部の瀬尾教授、武内准教授のご配慮にて、へき地では経験出来ない実験や臨床研究等に触れさせて戴き、地域でも多くの研究材料があることを再認識することが出来ました。

高知市土佐山地区(旧土佐山村)は高知市の北側に位置する中山間地域で、約1160人の方々が生活しておられ、市街地と比べると小規模ですが、保育園、小・中学校もあります。昭和38年に開設された土佐山へき地診療所は、土佐山地区唯一の医療機関であり、行政やデイサービスセンターと連携し、小児から高齢者に至るまでの幅広い年齢層にプライマリ・ケアを提供しています。今後、高知大学医学部家庭医療学講座の阿波谷教授のもと、新たに大学教員として同診療所の診療・運営に携わってまいりますが、大学附属病院とは異なったフィールドで、地域に密着した家庭医療を、学生ならびに臨床・後期研修医の諸先生方に、楽しみながら学んで戴けるものと思っております。

国立大学法人が公立医療機関の指定管理者になることは、全国初の先進的な試みであり、重責を感じておりますが、土佐山地区住民の健康管理を継続するとともに、人材の育成、地域での研究に精進する所存です。みなさまのご支援、ご指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



新任ご挨拶

眼科 科長　福島　敦樹

「難治性眼疾患」の治療を目指して

本年8月1日付けで上野脩幸名誉教授の後任として、眼科学講座を担当させていただくこととなりました。私は高知で生まれ、高知で育ち、高知医科大学（現高知大学）出身で、留学を除いては高知以外知りません。地元高知に対して強い郷土愛を持っており、高知大学医学部ならびに附属病院の発展に寄与できればと思っております。若輩であり、至らぬ点が多々あるとは思いますが、どうか宜しくお願い申し上げます。

現代社会では情報の90％は視覚から入るといわれており、視覚のインプット部が眼球です。直径わずか25mmの眼球ですが、角膜などの光学系と網膜などの神経系を中心として、非常に精緻に構成されております。この構造に生じた病変を治療する、あるいは病気を未然に防ぐことが我々の果たすべき役割です。眼科の病気は眼に限局することばかりでなく、糖尿病などの全身疾患に伴うこともあります。眼科検診で全身疾患が発見される場合もありますので、他科の先生方にはこれまで通り、ご指導をお願い申し上げます。

私はぶどう膜炎やアレルギー性結膜炎といった免疫が関与する眼の病気を専門としております。ごく最近になり、ぶどう膜炎には生物学的製剤を用いた治療が、またアレルギー性結膜炎の重症例には免疫抑制点眼薬を用いた治療が行われるようになりました。しかし、これらの治療法でも炎症をコントロールできない患者さんが多数おられますので、免疫を制御する新たな治療法を模索する研究を継続・発展させ、世界に発信していければと思っております。

継続して質の高い医療を提供するには，継続して質の高い医師を育てることが必要です．私の大切な使命は、高知大学医学部から，人の痛みのわかる良医を世の中に送り出すことだと思っております。その結果として、患者さんに少しでも満足していただける医療を提供できるように，精一杯がんばりたいと思っておりますので、今後とも皆様方のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

ふれあい看護体験

当院での「ふれあい看護体験」は、平成5年から毎年実施しています。今年も7月30日（水）に高校生21名が看護体験を行いました。その感想文をご紹介します。

●土佐女子高校2年／川田真奈美

ふれあい看護体験を初めてさせてもらいました。とても緊張したのですが、自分が思っていた産科婦人科とは違い、お腹にいる赤ちゃんの心拍数をモニターで聞いたり、点滴などでとても忙しかったです。

患者さん達はお腹にいる赤ちゃんが早く生まれないために薬を点滴したり、とてもつらそうでしたが、赤ちゃんの心拍数を聞く時は、とても幸せそうな顔をしていました。私は将来看護師または助産師の資格もとって一人でも多くの患者さんのサポート、ケアに従事できたらと思いました。

●土佐女子高校2年／筧美梨

今日は、整形外科の病棟の様子を見学させてもらいました。ある看護師さんは、血の気がひいてしまいそうな重症の患者さんに対しても常に笑顔で話しかけながらガーゼ交換などをしていて、すごく驚きました。患者さんを安心させるには、まず医療者の方が平常心を持つということの大切さを知りました。

また、高齢の患者さんや車イスの患者さんが、トイレや食事などの日々の何気ない行動をするのがツライというのを看護師さんがすごく気遣っている様子を見ていると、私もすごく温かい気持ちになりました。

ツバメの子育て支援

栄養管理室　細川　公子

ツバメは昔から害虫を食べる益鳥として、また、繁盛している商家に巣をつくることから、縁起の良い鳥として大事にされてきました。法においても、捕獲や虐待することは禁じられています。「ひまわりプロジェク」トにより、岡豊キャンパスでは60数個の巣が確認されました。出入り口や階段室に多く、巣はお椀型のツバメ、壷型のコシアカツバメの2種類がみられます。ツバメは高知では3月の末に東南アジアから渡ってきて、7月中旬頃までの約4ヶ月間に2～3回子育てをします。子育て中のツバメの夫婦は1日に13時間働き、1日1000匹のガやウンカ、ハエなどの害虫を空中で捕獲しているという報告もあります。巣の周辺はフンで汚れますので、清潔を保つよう、お互いに清掃を心がけたいものです。

子育てを終えると大きな群れとなり、秋風とともに南に向かいます。無事であれば、来春には再び岡豊の巣に帰ってきます。私たちの暮らしに人知れず働いているツバメたちの子育てを、温かく見守ってあげましょう。

職場紹介　神経科精神科

「神経科精神科の拡がる未来」

神経科精神科 科長 加藤 邦夫

精神疾患に対するイメージは時代の空気を反映し、精神医療の内容はそれに応じて変化します。半世紀前には、精神障害者=危険のレッテルのもとに閉鎖病棟が数多く作られ、貧困な医療体制がさらにイメージを悪くして差別を助長していました。今でも時々新聞で精神障害者と思われる方の事件が報道されることがあり、そのたびに差別を助長するような発言もみられますが、精神疾患に対する認識が大きく変化した現代では、病棟開放化の流れを揺れ戻す動きはまったくおきていないことに安堵を覚えています。この背景には、地域との関わりをもつことによって病棟開放化を実現してきた多くの精神医療スタッフの長年の努力があります。神経科精神科医局では大学病院における精神疾患の治療において、科学的な根拠のもとに治療をすすめると同時に、精神疾患に対する差別的な認識が解消されるように気をつかっています。病院のスタッフの中には、いまだに精神医療に対する偏見を持ち、精神病患者に対して排他的態度を示す方がいることは甚だ残念ではありますが、現役世代への啓発を重ねると同時に新しい世代への教育につとめたいと思います。

精神疾患治療の潜在的需要はもともと大きいため、社会に余裕ができるとこの需要が顕在化するので、大学病院に限らず地域精神科医療では外来患者数が毎年増え続けています。精神疾患を啓発しようとするマスコミの影響もあり、今では子供から高齢者にいたるまで気軽に精神科を受診できるようになってきました。東京では中学生・高校生が精神科に通院するのが「トレンディー」であるとされているようですが、これはこれでまた困った現象と言わなければなりません。当大学病院では、子供に対しては、主として発達障害や若年発症の統合失調症を中心とした精神疾患の治療をするために、昨年より「子どものこころ診療部」が小児科との共同診療部としてスタートしています。高齢者に対しては認知症や高次脳機能障害の治療のために、平成17年から「物忘れ外来」が専門外来として設立され、それぞれ専門医がかかわる体制ができています。そのほかの一般外来では、統合失調症、うつ病などをはじめとして、様々な精神疾患の治療が行われています。難治性うつ病患者に対して、修正型電気けいれん療法や磁気刺激療法を行っていることも当科の特徴です。また緩和ケアチームが一昨年より立ち上がり、試行錯誤を繰り返しながら、重篤な身体疾患をもつ患者さんの精神的なケアを行うという難問に挑んでいます。この分野は精神科医にとっては未知の領域であり、行政のすすめる在宅緩和ケアなど、今後特別な診療体制の構築が必要となるかもしれません。最近の医療情勢は3年先を読むのも困難ですが、地域医療の活性化と先端技術開発に最大限の貢献をすることが公的病院の役割であると自負していますので、時代の流れの先陣を切りながら今後も奮闘を続けていきたいと思っています。

診療状況

区分	外来	入院	
	延患者数	延患者数	稼働率
5月	19,709人(新来1,476)	15,338人	81.8%
6月	20,596人(新来1,734)	15,587人	85.9%

	院外処方せん発行率	紹介率(診療報酬上の紹介率)
5月	80.19%	59.4%(51.5)
6月	80.46%	62.2%(54.6)

編集後記

今年4月から消化器内科学大西教授の指導の下に病院ニュースの編集委員を担当しています。文才の無い私には分不相当と思っていますが何とか頑張っていきたいと思います。今回のニュースでは、「病院機能評価審査を控えて」(倉本病院長)や「高知市土佐山へき地診療所について」(松下先生)など、高知大学医学部附属病院の置かれている医療環境や、へき地診療に関する取り組みについて新たな話題を提供できたように思います。職場紹介欄においては、精神疾患に対する治療内容の歴史的変遷に言及すると共に、神経科精神科の拡がる未来について紹介され、精神疾患に対する差別的認識が一日も早く解消されることを願っています。今後は、各診療科で取り組まれている先端医療に繋がる基礎的研究についても紙面が許す限り取り上げていきたいと思いますので、何卒ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

(文責　清水惠司)